

5. 保育所と学校の連携

(1) 保育所・学校連絡協議会とその取組

日野町保育所・学校連絡協議会

構成：日野町内の保育所、学校、教育委員会事務局及び関係機関の職員

目的：日野町教育振興基本計画に掲げる教育目標の実現を図る

事業：幼児教育、学校教育の推進に関するこ

　地域・家庭連携に関するこ　他

各種会議：

- ① 保学連携推進会議
- ② 架け橋プログラム評価検討会議
- ③ いじめ・不登校対策連絡会議
- ④ 子ども支援連絡会議
- ⑤ 食育推進連絡会議

① 保学連携推進会議

構成：保育所長、学校長、保学連携担当、教委担当

目的：連絡協議会の事業全般について協議し、会の目的達成を図る。

② 架け橋プログラム評価検討会議

構成：保学連携担当者、5歳児担任、1年担任、教委担当

目的：架け橋プログラムの進捗状況の把握、評価を実施し、改善を図る。

③ いじめ・不登校対策連絡会議

構成：生徒指導担当、いじめ・不登校担当、要対協事務局担当、教委担当

目的：現状の共有及び対応策について協議し、未然防止、解決を図る。

④ 子ども支援連絡会議

構成：特別支援教育担当、母子保健担当、教委担当

目的：特別な支援を要する幼児児童生徒についての情報交換、共通理解を行い、一貫した支援を行う。

⑤ 食育推進連絡会議

構成：給食担当、栄養士、栄養教諭、管理栄養士、教委担当

目的：保育所、学校における食育の推進を図る。

《合同研修会》

令和7年8月4日（月）16時～18時 @日野学園

○講師 鳥取大学地域学部長 塩野谷 斎 教授

○参加者 日野学園 9名 ひのっこ保育所 6名 日野町教育委員会 3名

○研修内容 I. 「教育」と「保育」

II. 保育所保育指針における「10の姿」と小学校教育

III. 保育所における言葉の保育と小学校の国語教育



研修会で特に重要だと認識されたこと；「遊びを通じた学び」と「言葉の獲得」

○学びの基礎

- ・主体的に遊ぶことが学び
- ・今のステージを充実させる
- ・遊びの中の学び、直接的な経験
- ・夢中になって遊ぶ体験が学びの基礎となる土台を耕す

○言葉と理解

- ・体験、実感、言葉
- ・言葉の理解は、最後は実感
- ・理解力、読解力の低下

○教育の接続

- ・保育 = 保護 + 教育
- ・保育から（義務教育学校）後期課程の教育までつながっている

○遊びと体験の重要性

- ・保育所では遊びが中心となるため、体の使い方や文字・数字に触れる遊び等、多様な経験を取り入れることが、幼児の「もっと知りたい」という意欲につながる。
- ・直接的な体験や経験から導き出される言葉は「生きた言葉」であり、感性を育て、言葉の理解に深く結びつく。

○言葉の理解と課題

- ・学校生活で、語彙が少なく、国語の読解力が低い、文章が読めない児童が多いという実態がある。
- ・幼児期からの体験と、それに実感を伴わせた言葉の獲得が、この読解力低下の課題解決に不可欠である。
- ・現代の子どもは、動画やSNS等の影響で「すごい解釈」をすることがあり、直接的な経験不足が影響していると感じる。

○発達段階と接続

- ・幼児・児童の発達を踏まえた教育をしていくことが力を育てる。

今後自分が行いたいと考えたこと

○体験と環境づくり

- ・幼児・児童にさまざまな経験をする機会を増やしていく。
- ・家庭では難しいどろんこ遊びや感触遊び等を取り入れる。
- ・幼児・児童が主体的に遊び、遊びきる・遊びこめる環境づくりを行う。
- ・経験した際に「冷たいね」「グニュってするね」等、経験を言葉にして返す機会を増やし、言葉の理解を促す。

○学校での授業・指導の工夫

- ・わくわく学びたくなるしきけや、個別最適な学び、協働的な学びを授業に実現する。
- ・児童が楽しく過ごせるようにする。
- ・「10の姿」を踏まえた指導を行う。

○家庭との連携、保育所・学校の連携

- ・家庭と連携し、小さい時から絵本の読み聞かせを通じて言葉の力をつける。
- ・保育士と教職員との協議の場を設定し、充実させる。
- ・連携の中で相互理解を深める。

《保育参加》

令和7年8月8日（金） @ひのっこ保育所

保育参加後の協議内容

塗り絵（花火作り）の活動より

導入・説明

- ・幼児は説明開始から集中して聞けていた。
- ・保育士が声の抑揚やトーンを変えて話し、集中を引き出していた。

環境構成

- ・幼児の活動に合わせて、シートを敷いたり敷かなかったりする環境構成が行われていた。

声かけ・指導

- ・保育士の声かけは「いいね」「すごいね」といったプラスの評価が中心で、幼児の自信と安心を引き出していた。
- ・幼児の発言を拾い、対話しながら活動の説明や友達の活動につなげ、活動を充実させていた。
- ・完成した作品を示すことで、幼児が活動をイメージしやすくなっていた。

《保育公開・協議》

令和7年8月19日（火） @ひのっこ保育所



1. 保育公開・協議についての感想

【協議・連携について】

- ・保育士目線、教員目線それぞれの具体的な意見交換ができ、お互いの実態や実践への考えを知る貴重な機会となった。
- ・顔を合わせて幼児の姿を語り合う時間、実践を見合うことが保小連携で最も大切だと再認識した。
- ・保育所の実践を見て、学校側も取り入れるイメージを持ちやすくなった。

【保育所の気づき】

- ・「プールで目をあけられるように」「一人での作品も大切」等、学校側からの意見が新鮮だった。
- ・学校の児童が「自分でせず人に頼むことが多い」という話を聞き、保育所の関わりを見直すきっかけになった。

2. 今後の実践に生かしたいこと

【主体性と自立の育成】

- ・「できる」を増やせるよう、過度な支援をせず、幼児に任せる場面を作る。
- ・自分で行動する意識を高める関わりや環境設定を行う。
自分で考える言葉かけを意識する。
- ・学校では意図的に困る瞬間を作り、「気づき・考え・行動する」力、困ったら自分から助けを呼べる力を育てる。

【連携の具体化】

- ・協議で出た内容を「プログラム」に反映させる。
- ・保育所でつけた力を、学校でさらに伸ばせるようにする。
- ・保育所の「オーラル体操」を学校の朝の活動に取り入れる。

《5歳児と1年生との交流活動》

令和7年10月7日（火） @ひのっこ保育所

司会：1年生

内容：1年生発表（音読、歌、クイズ）

うめぐみ発表（なわとび）

遊び（口ケットクレヨン）

読み聞かせ（1年生→5歳児）

※実施にあたり、事前に各担任で実施案の検討、
幼児・児童の実態についての情報共有を行う。



実施後の振り返り

1年生は、5歳児の笑顔、響く声、そして縄跳びの演技に感銘を受け、その感動は多くの児童が振り返りの中で絵や文で表現するほどだった。この交流を通して、1年生は「文化祭の発表をもっと頑張ろう」と決意を新たにした。

5歳児は、1年生に縄跳びを見てもらい、たくさん感想をもらったことで大変喜んでいた。また、久しぶりに再会して一緒に遊んだり、1年生に絵本を読んでもらったりする等、関わりを持つことができて良かったと感じている。

《授業公開・協議》

令和7年11月17日（月） @日野学園



児童の様子について

- ・参観日当日、朝は興奮して多弁だったが、参観授業で緊張し、役割演技が普段通りにできなくなつた。
- ・恥ずかしさや「失敗したらどうしよう」という気持ち、さらには「見ていてる人に認めてほしい」という成長の芽生えが見られた。

教師・支援員からの指導・支援

- ・LD等支援員からの指導を受け、「静と動」を取り入れた授業を意識して実践している。
- ・児童の「認めてほしい」という気持ちを育む環境づくりを支援していく方針。

参観者より

- ・「教科書を読む」「話を聞く」といった学習に臨む基本姿勢が育っている。
- ・保育所時代から緊張しやすい子も、自分から発言できるようになり、個々の成長が見られた。
- ・1時間意欲的に学習に取り組む姿が見られた。

意見交換、指導助言

- ・保育所での体験的・感覚的な学びを、入学後に言葉による思考・議論に発展させる方法を考える必要がある。
- ・友達との協力や関わり合いの中で成長する喜びを感じさせたい。
- ・みんなに注目されるのが恥ずかしい子がいるなら、2か所に分かれて演技するなど、全員が役割を演じて考え方持てるようにする工夫も有効ではないか。
- ・お互いのよさを言葉で伝え合う活動を取り入れると良い。
- ・児童同士の横のつながりができるような工夫を学習や生活の中に取り入れてほしい。
- ・教材を事前に何回か読んでおくことで、学習のねらいにさらに迫ることができるかもしれない。
- ・幼児期の終わりまでに育てたいことについては、作成中のカリキュラムをぜひ活用し、環境作り等の要素も付け加えていくと良い。

《保学連携推進会議》

第1回（令和7年6月20日（金））

- ・今年度の事業
- ・保育参加
- ・保育公開

第2回（令和7年9月1日（月））

- ・保学交流会
- ・授業公開

第3回（令和7年12月9日（火））

- ・保学交流会（体験入学）

《架け橋プログラム評価検討会議》

架け橋期のカリキュラム開発会議及びワーキンググループにより、カリキュラム作成中のため未開催

今後、ワーキンググループを本会議に移行する予定

《いじめ・不登校対策連絡会議》

第1回（令和7年7月1日（火））

- ・いじめ・不登校の現状、その他生徒指導上の課題

第2回（令和7年11月20日（木））

- ・いじめ・不登校の現状、その他生徒指導上の課題

《子ども支援連絡会議》

第1回（令和7年6月30日（月））

- ・幼児児童生徒の状況、個別の教育支援計画・指導計画の作成、引継

第2回（令和7年11月27日（木））

- ・幼児児童生徒の状況

《食育推進連絡会議》

第1回（令和7年5月19日（月））

- ・新献立の作成、交流給食

第2回（令和7年10月10日（金））

- ・上半期の食育活動状況、保学連携給食メニュー、学校給食試食会

(2) 所長・校長会

開催日：毎月月初め

構成：教育委員会教育長、ひのっこ保育所長、日野学園校長・事務主幹
教育委員会事務局教育課長・指導主事・学事担当

協議内容：教育委員会からの指示・連絡事項

幼児児童生徒の様子

- ・長期欠席幼児児童生徒の状況
- ・特別な支援を要する幼児児童生徒の状況
- ・その他、気になる幼児児童生徒の状況

保育所、学校の取組

その他

(3) その他

《保育所と学校の交流》

- ・青パパイヤ苗植え、収穫（5歳児、5年生） @学校畠
- ・学校図書館訪問（5歳児） @学校図書館 他
- ・体育祭見学（5歳児） @校庭
- ・校内マラソン応援（保育所幼児、後期課程生徒） @保育所付近道路



《学校運営協議会》

- ・保育所長が委員の一人

6. 本年度の取組の成果と課題

《成果》

- ・ 5歳児は、1年生への憧れから学校生活への期待が高まり、文字への興味や、活動への主体的な関わり、発表意欲も向上した。
 - ・ 1年生は、5歳児の頑張る姿から、「自分も頑張ろう」という気持ちが生まれ、それが翌日以降の活動への持続的な意欲につながった。
 - ・ スタートカリキュラムによる柔軟な対応により、児童は安心感を持って学校生活に順応していった。
 - ・ 保育・授業公開を通じて、保育士・教職員が幼児・児童の具体的な成長を感じることができ、指導への自信と喜びにつながった。
- ☆保育士と教職員が、継続的な対話（カリキュラム作成・情報交換）を通じて指導の共通理解と保育・授業等の活動の向上を図ることができた。その結果、幼児・児童が自信と期待を持って、意欲的に活動に取り組むようになった。

《課題》

- ・ 時間の確保

保育士、教職員が、日常の保育・授業に加え、カリキュラム作成や情報交換のための会議時間を確保することが難しい。

- ・ 指導観のさらなるすり合わせ

「何を大切につなぐか」は合意できても、実際の具体的な指導方法や評価において、保育所と学校のギャップを完全に埋めるのは難しい。特に、遊びを通した学びと教科指導の接続について、理論だけでなく実践レベルでの共通理解を深める必要がある。

- ・ 保護者への情報提供と理解促進

家庭教育における学びの連続性について啓発する必要がある。

- ・ 保育士間、教職員間の意識の違い

幼児教育と学校教育との接続に関心の高い職員とそうでない職員との意識の違いを埋め、全員がその重要性を認識し、実践を積むようにしなければならない。

- ・ カリキュラムを作ることが目的にならないように

常に改善を図り、幼児・児童にとってよりよいものにしなければならない。

7. 次年度に向けて ～第3次日野町保学連携推進計画の策定

《日野町教育振興基本計画（第IV期）》

日野町教育振興基本計画（第III期）の計画期間は令和7年度まであり、令和8年度からは日野町教育振興基本計画（第IV期）による。よって、日野町保学推進計画も、この計画を踏まえて改定する必要がある。

《かけ橋期のカリキュラムによる教育内容のつながり》

かけ橋期のカリキュラムによる教育内容のつながりを基軸とした幼児教育と学校教育との接続により、学びや生活の基盤を育み、持続可能な社会の創り手となることができる力の基礎を育む。

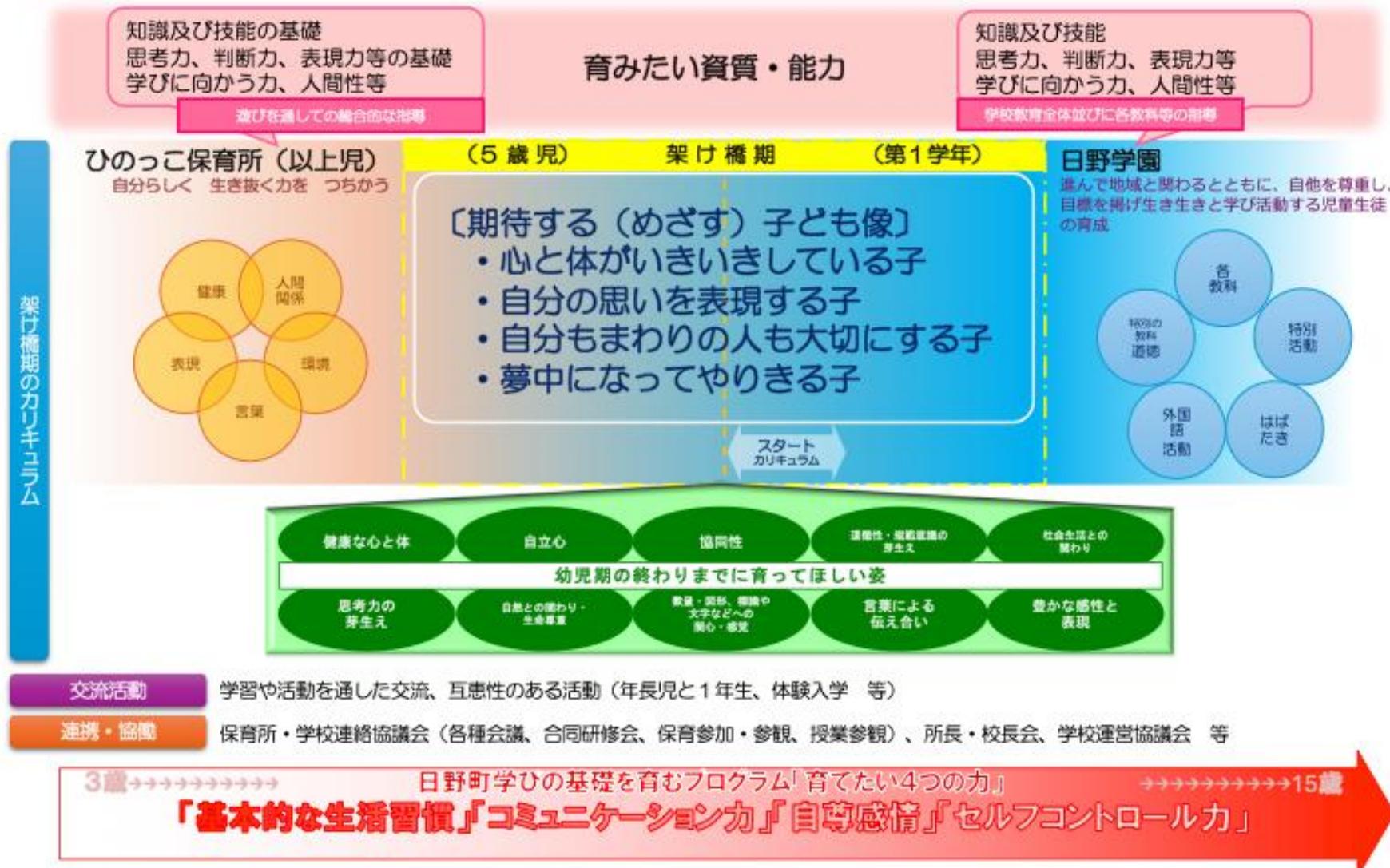
《保育所・学校連絡協議会を核とした人、組織のつながり》

交流学習や研修等による幼児・児童や保育士・教職員のつながり、カリキュラム実施等を通した地域の人とのつながり等、保育所、学校、保護者・地域の人や組織のつながり（連携）を深化させる。

プログラムのイメージ図

教育目標:ふるさとを愛し 心豊かにたくましく羽ばたく日野の子の育成

架け橋期を通じて学びや生活の基盤を育み、持続可能な社会の創り手となる力の基礎を育もう！



第3次日野町保学連携推進計画

幼児・学校教育接続プログラム

- 架け橋期のカリキュラム
- 幼児・児童の交流活動
- 保育士、教職員、保護者、地域の連携・協働



架け橋期を通じて学びや生活の基盤を育み、
持続可能な社会の創り手となる力の基礎を育もう！

令和9年3月

日野町保育所・学校連絡協議会



私たちの 「架け橋」づくり

～新しい「幼児・学校教育接続
プログラム」が始まります～

架け橋期を通じて学びや生活の基盤を育み、
持続可能な社会の創り手となる
力の基礎を育もう！

第3次日野町保学連携推進計画（令和9年3月）

日野町保育所・学校連絡協議会

日野町の歩み：連携の実績と、新たな挑戦

2005（平成17年）「学びの基礎を育むプログラム」策定
2012（平成24年）「学びの基礎を育むプログラム」改定
2017（平成29年）計画改訂「子どもたちが豊かで豊かな学びをつなごう！」

これまでの取組は大きな成果を上げてきましたが、いわゆる「学びプログラム」など、生活や学習スタイルの急な変化に対応しきれない子どもたちの課題は依然としてあります。

第3次計画は、これまでの実績を土台とし、国の新たな方針も踏まえ、これらの課題に正面から向き合うための進化形です。



第3次計画がめざすもの

- ▷計画の名称：『幼児・学校教育接続プログラム』と改称
- ▷スローガン：架け橋期を通じて学や生活の基盤を育み、持続可能な社会の創り手となる力の基礎を育もう！
- ▷2つの柱：①架け橋期のカリキュラムの実践
②人・組織のつながりの深化
 - ・幼児・児童の交流活動
 - ・保育士、教職員、保護者、地域の連携・協働
- ▷計画の目的：2つの柱により、幼児教育と学校教育の円滑な接続と、質の向上を図ります。
- ▷「幼児期の終わりまで育ててほしい姿」を手掛かりに、一人一人の発達を連続的に捉えます。
 - ア 健康な心と体 イ 自立心 ウ 協同性 エ 道徳性・規範意識の芽生え オ 社会生活との関わり
 - カ 思考力の芽生え キ 自然との関わり・生命尊重 ク 数量や図形、模様や文字などへの関心・感覚
 - ケ 言葉による伝え合い コ 豊かな感性と表現



「学びの基礎」となる4つの力

保育所から学校へ一貫した取組をご家庭と一緒にになって実践し、学びの基礎となる4つの力を育てます。



基本的な生活習慣

心身ともに健やかな生活を送るためにもととなる生活習慣。
視点：食事、睡眠、整理・整頓、あいさつ・返事



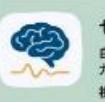
コミュニケーション力

他者の話を聞き、気持ちを理解し、情報を収集したり発信したりする力。
視点：聞く、話す、関わる



自尊感情

自分を肯定的に認め、自分らしさに自信をもち、自分を価値あるものとして思えるようになること。
視点：意欲・自己実現、自己肯定感



セルフコントロール力

自分の感情や欲望をコントロールする力。
視点：自己抑制、根気強さ

「架け橋期」とは

義務教育開始前後の5歳児から1年生までの2年間。
生涯にわたる学びや生活の基盤をつくる重要な時期です。

保育所の学び

- ・「遊び」を通じた総合的な学び
- ・生涯にわたる生きる力の基礎を育む



学校の学び

- ・「教科」を中心とした体系的な学び
- ・社会で自立的に生きる力を育む

▷架け橋期のカリキュラム

・5歳児から1年生までの2年間を見通し、保育所と学校が協働して作成する教育計画のことです。

・「遊びを通した総合的な学び」から「各教科の体系的な学び」への円滑な移行を実現します。

☆期待する（めざす）子ども像

- ・心と体がいきいきしている子
- ・自分の思いを表現する子
- ・自分もまわりの人も大切にする子
- ・夢中になってやりきる子

▷スタートカリキュラム

・入学からの10日間に実施する生活科を核とした合科的・関連的なプログラムです。

・幼児期に親しんだ活動を取り入れ、子どもたちが安心して学校生活を始め、主体的に自己を発揮できるようにします。

3つの方法で「架け橋」を共に築く

本プログラムは、以下の3つの取組を有機的に連携させることで、その目的を達成します。



架け橋期のカリキュラムの実験
幼児教育と学校教育のつながりを明確にし、一人ひとりが生活の変化に対応できる力を育む。



幼児・児童の交流活動
幼児は学校生活への期待感、児童は新しい心や自己の成長を感じます。
例：1歳児と1年生の交流、体験入学



保育士、教職員、保護者、地域の連携・協働
相互理解を深め、円滑な接続に向けた指導改善や、長期的な視点での適切な支援を実現する。

実践の現場から①：5歳児の学びと育ち

遊びのプロセス：「やりたい」から「やり遂げる」へ

活動例：秋の自然遊びに取り入れよう

- 1.発つき（Discovery）：子どもたちが落ち葉や木の実を集め、色や色の違いに気づく。
 - 2.実験操作（Trial & Error）：集めたもので何ができるか試し合い、試したり工夫したりする。
 - 3.協働（Collaboration）：月次の目的に向かって協力し、一つの作品や遊びを振り上げる。
- この活動は「協同性」「思考力の芽生え」「豊かな感性と表現」といった「10の姿」につながります。



実践の現場から②：1年生の円滑なスタートを支える

スタートカリキュラム（The Start Curriculum）

幼児期の遊びを通した学びを土台に、子どもが主体的に自己を発揮しながら学校生活に慣れるための、入学当初10日間の特別プログラムです。

弾力的な時間割（Flexible Schedule）
45分に構成され、活動に合わせて時間を使います。

体験的活動（Experiential Activities）
「がっこうたんけん」や、歌、手遊びなど、保育所で親しんだ活動を取り入れる。

生活科が核
生活科を中心に、各教科の学びを合科的・関連的に接続。



家庭で築く学びの土台

～ご協力をお願いしたい3つのサポート～

幼児期の教育で培われる力は、ご家庭の日々の生活習慣の上に成り立っています。
この「架け橋期」を豊かなものにするため、ご協力ををお願いいたします。

規則正しい生活習慣の確立

心と体の健康が、最も大切な学びの基礎です。特に朝食は、集中力と活動意欲を高める大切なスイッチです。
「早寝・早起き・朝ごはん」のリズムを確立しましょう。

自分でできるこ とを増やす

お子さまの「自立心」を育てることが、「主体性」につながります。「自分でやればできる」という達成感を大切にしましょう。

着替え、荷物の整理など、手伝いすぎず、「最後までやる」機会を与えるましょう。



「話を聞く力」「考 える力」を 育む

学校では、先生や友達の話を聞き、自分の考えをまとめる機会が増えます。相手の目を見て最後まで話を聞くことを意識させ、なぜ?どう思う?といった問い合わせで、お子さまの考えを引き出しましょう。

私たちが目指す未来：日野町の明日を創る子どもたち



この「架け橋」を渡ることで、子どもたちは遊びで育んだ力を、主体的な学びに変えていきます。そして、生涯にわたる学習の基礎と、変化の激しい社会を生き抜く力を身につけます。

私たちは、ふるさとを愛し、心豊かに、たくましく羽ばたく「持続可能な社会の創り手」を、地域一丸となって育んでいきます。

日野町保育所・学校連絡協議会

問合せ先：日野町教育委員会事務局教育課 0859-72-2107

イラストはGemini™およびNotebookLM™ (Google LLC) により生成されたものを使用しています。

ご清聴ありがとうございました